牛沢　将軍の追撃は続き、この地に来たとき、一行の食糧運搬の役牛が急に産気づいて、一頭の仔牛を産んだ。仔牛をひいては追撃もできないので、仔牛を付近の木に結び、一行は立ち去った。残された仔牛は付近の「クゾウ(葛)」を食って成長した。そのためこの沢には、今もって葛が生えないといわれている。

菅江真澄の「面日日記」には、次のようにかかれている。「昔、藤原の朝臣利仁将軍子ある牝牛にうちのりて、玉宮の御神にまいり給うほどに、ずんざどもその牛を藤蔓もて、山売子木（やまぢさのき）につなぎて葛の葉、垂葉（さがりは）薊てうものを秣とす。此牝牛食つきて、麓に残りたる子牛をしたいてつなぎたる売子ノ木を根こぎて逃下りぬ、それより此地を子牛沢といい並て此のあたりを呼て牛股沢とぞいえける。そのよしにて玉ノ明神の御陸山にはかつて山売子ノ木生えることなく、藤蔓もまたまとうなく、垂葉薊てうもの、また葛葉、葛花も絶てあらざるよしをいえり」とある。